

第四節 民謡

奄美は古くから琉球文化圏に属し、民謡もその多くは琉歌の影響を受けているといわれる。

特に歌詞の形式は、八八八六式の三十字を基調として作詞されており琉歌の影響がうかがわれる。

八八八六の三十字の形式は、五七七七七の形式をとる和歌に近づくための手法ではなく、和歌が詠む歌へと発達したのに対し、琉歌は、三味線の伴奏を得てもっぱら歌う方向に発展したものと考えられる。したがって三味線に合わせて歌うために自然と三十字の形式をとるようになったものと解せられる。

奄美諸島の中でもとりわけ沖永良部島は、琉球とのかかわりが深く感じられる。そのことは断片的ではあるが、琉球と共通の民謡や舞踊等が多いことから察することができる。

しかし、琉球と共通する民謡や舞踊が多いとはいえ、琉球のように三味線の楽譜（工工四）が存在し、正調と

いわれるものがあり、また流派が組織され、家元制度が確立されているわけではない。さらに一つの歌曲について歌詞が定まっておらず、この点では奄美の民謡とその性格を一つにしている。

歌詞を概観すると、奄美・琉球と共通する内容のもの、沖永良部独特のものがあり極めて多彩である。その内容を分類すると、気象、天候、倫常（親子、夫婦、男女、一般世間、言行）、世態、人情、仕事、暮らし向き、身体容姿等々あらゆる分野にわたり歌いつづられており、表現の豊かさ、おおらかさ、人情のこもった一語一語に感嘆させられる。

前述したように民謡はそのほとんどが琉歌の形式をとっており、どの歌曲にも共通して歌えるという特色があるので歌曲別のほかに歌詞を整理のうえから五十音順に配列し、その次に歌意を要約して記した。なおわらべ歌については、昭和四十九年五月に和泊町中央公民館が発行した「沖之永良部民謡集」から転記した。他の民謡は和泊町老人クラブの協力を得て収集し、「村めぐりの歌（仮題）」は郷土史料として見のがしてはならないことから本節で紹介することにした。

一童歌

(手々知名・沖 かね 口述)

童謡は、幼児期において、彼らを取り囲む自然界の動植物、特に動物に感動して突発的に口ずさんだものである。それゆえに定まった韻律があるわけではなく純真無垢な童心を遺憾なく表現しているといえる。

(一) わらわ歌

① かんこ(螢)

かんこかんこ わ家ぬ門ち めんしヨリ
めんしヨリ あさばに ゆうばに しーてイ
待ちヨい 待ちヨい

(解) 梅雨上りの夕闇を点々と縫い連ねて飛び交う螢を門前に出てさし招く歌

「螢よ螢、我が家の門前に来い、朝飯、夕飯盛り並べて待ちうけているから、今宵は早くきてくれ」

④ たーくなじゃ(とかげ)

石ぬ穴ぬ たーくなじゃ うだちめーが
たーくなじゃ にしみぬ島ち 嫁むれが

(解) とかげは、その色彩が美しいので、男性の盛装に見たてての歌

ニシミ(上城) は島内随一の美人の産地という
「石垣の穴住いのとかげよ、今日は着かざつてどこへ出かけるのか。きつとニシミの島に嫁さがしにでしよう。」

⑤ くっかる(深山しょうびん)

くっかるかーる 美らさは あーしが
うとウげぬ長さぬ ユイユイ

(解) クツカルは、南国から梅雨前にやってきて、梅雨を呼ぶように朝夕「クツカル」と鳴くのでその声を耳にすると、やがて梅雨の訪れを告げられるように、昔なら薪の準備を急ぐもので

② いしやとウ(かまきり)

いしやとウいしやとウ まいしやとウ 豆ぬ
熟らばどウ 食ましユんど

(解) かまきりを捕えて、ガジュマルの小枝に遊ばせながら歌う歌

「かまきりよかまきり、カマをふりふり小枝で遊べよ。やがて秋風が吹き初めて豆が新しく採れたら、うんと食べさせてやるよ。それまでは、カマをふりふり待ってくれよ。」

③ あんぐア(芋虫、土の中で唐芋の皮をむしり食べる虫、色白くぶよぶよ肥満して、肌は柔軟、指でつまみ取れば首をしきりに振り回す)

あんぐアあんぐア 唐うだんとウ 大和うだんとウ
あんぐアあんぐア 大和だーが 唐だーが

(解) あんぐアが鈍感ながら、首をしきりに振り回すので、唐(中国)はどこだ、大和はどこだと、からかっている歌である。

⑥ ちやむ(倭鶏)

あがりぬ ちやむ鶏ぬ 羽打ち くくてー
くくてー

(解) 東隣家の観賞用のチャボ鶏が、羽ばたきをして、かわいらしい声で歌っているのを表現したもの。

⑦ 屋子母のカン

よーむぬかん 高木ち登ったい 低木ち登ったい
きーしく かーしく

(解) 屋子母のカン(木登りの名人)が、高い木と低木と、低い木といわず、枝から枝へと飛びま

わる様を表現したものを。きーしく、かーしくは
対句。

(二) 童祝詞(童イグトウ)

- ① とーとウはい(お月様) わぬ(私を)
ふでいらち(成長させて) 給り(ください)

(解) お月様に両手を合せて 自己の成長を祈ることば。

- ② 牛ぬけーべ(牛程に) なり ていんとぬけーべ(天
空の程) なり

(解) みかん、桃、バンジロ等果物をちぎる時の願
望

- ③ 海ぬふーイユ (大魚) 食うてイ はんま

(解) 無意識に墓地などゆび指した時に、その右手
の人さし指の罪亡ぼしに口中に入れて、前歯で

かみしめて、海の大魚もはんま(飯米)もお供
えしますから、不敬の罰を許してくれという意。

- ④ 今泣ちユ人ぬ目は 誰目か できにばってぬ(大
根畑の) ちんばら(意不明) 目

(解) 意不詳

- ⑤ ひなごひなご 誰が尻はひたか ひた人は飯炊ち
飯粥

(解) 意不詳

- ⑥ ガラシ(鳥)ぬはじ(足)は折つてイ給り
吾はじ(私の足)は折つてイ給んな

(解) 高い所から飛び下りる時のイグトウ

- ⑦ ゆむぬ(ネズミ)ぬ歯とウ 吾歯とウ みー(生
え) べーく(くらべ)

(三) お手玉歌(玉城・大里マツ 口述)

お一つ お一つ お一つ お二つ お二つ 鎌倉か
えしておーてんばられ

りようぐま りようぐま りようぐま アンベー
アンベー アンベーの お逃し お逃し お逃し
オサラシ オサラシ オサラシ ピキセンネ ピキ
センネ センネ オツカイシヨー オクヤマ オトシ
テ カキマツヨー二ヨー 三ヨー 四ヨーオヤ
マルターラ ムーデーター

イーツマ タンタンタケツミ 明日は連華の花開き
トテマコイ 向うのお山に ききようのお花が咲いた
か 開いたか 私知らぬかいな ぬーかいな
ヨンドコドツコイ あれ これ しよー

オナセ オキリ イツカン シヨー

(四) お手まり歌

一 二 三 四 五 六 七 八 七 七
七やが 綿染み 紺染み かえて ヒヤク ハイ

- ⑧ 雨は降んな降んな 太陽は照り照り

(解) 乳歯のぬける時のイグトウ。イグトウを言っ
て上あごの歯は床下に、下あごの歯は屋根上に
投げる。みーべーくは生え較べの意。欠けるこ
とのないネズミの歯にあやかりたいという意が
あるよう。

(解) 雨天が続いて、うつとうしく、外に出て遊び
たい時、天気になってほしいと願望のイグトウ。

- ⑨ ぐぶぐぶ 提灯なんな ふでいるく(かんぱい)
なんな 平さなてイ給り

(解) 何かにぶつかって、頭や額等を打った時、こ
ぶにならないよう、きずにならないように平手
でこすりながら唱えるイグトウ。

ハイ ハイ ハイ お呉れよお呉れよ なぜ
飯合べる 腹が痛 痛 サクシノムンシ シヤ
ムンシヤ ソノラン その時 赤子ができた でき
た
その子は 男の子なら ジナに預けて 寺の塀から
突き落された 誰が落した お梅が落した お梅と
桜と替えたなら お梅はすぐイトー^等になれた 桜は
よいとほめられた

(五) 唐秘歌 (玉城・大里マツ 口述)

ちん ちん 祝らしや コート里之子 一皿ちきとウ
てイ 祝らしや しん 候
吾が家が廻ら 廻らち 松千代衆が一祝に 上城ぬ
按司加那志が乗り 御候ぬ馬や 綾染 黒染 真黒
かんじや 筑之子 棚場ぬ ミユズミ 山原 国頭
渡嘉敷な前ぬ 泊いぬ 十条ぬ タナビナムチユー
サイーヌ マクルシガ タツクラバク 賜り
シツタロガニヤ クレマークレタ ミカチ 海ぬ
エーグや 砂ぬ細さぬ 彼等が作たぬ 唐芋ガラスム

一皿どウ 食しユル 二皿どウ 食しユル
十七七十 七 十七八ぬ頃なりば ニシタン隣り
ぬ代役 段々代役 段々サーサ ヤリサーサ
昨年や昨年 二つ 祝らしや 三つ ミンジク
四つ 豊かや 五つ 一升炊き 六つ 物屑 七つ
七幸 八つ 山から 九つ 管巻 十や ウーチク
チク 内クマぬ ヤシ衆が 具志堅 具志堅
一つ 大良 二つ タラ 三つ タラ 四つ タラ
五つ タラ 六つ タラ 八つ タラ 九つ タラ
十ん タラ 稲当 ナブルカチ ウキ衆が三升や
牛し買うたさ ウツツルバイニ カツツルバイニ
預きてイ 牛し買うたさ。

(六) 子守歌

① 石ぬ上に土置いてイ 土ぬ上に花植いてイ
うぬ花ぬ咲かば 吾子にくりら
② 生まり報はあしが 育ち報ぬなだな
やきずみになてイむ 生し子一道路

③ うらがいちやん泣ちやんて うら親ぬ聞ちユミ
吾ぬどウ親なとウてイ うらむ守ゆる
④ 子守しユぬ哀り 夜昼物思み
物思み忘りらば 茶祝しヤーぶら
⑤ 玉黄金生し子 がにかなしヤあゆり
他人ぬ身ぬ親む がんがあゆら
⑥ 溜池ん当ぬ童んちヤ ニービル採いが行かじな
家やじ母ちはたてイ 行こうか
⑦ 泣くなくな蔵ひやぬ子 泣くなくな筆子ぬ子
う蔵米取てイ来ち 粥炊ち食うしユんど
⑧ 泣ちさ子や泣ちユい ふぎ鍋やむゆい
畑からやいめい なー いちヤがしゆる
⑨ 泣ちさ者ぬ顔に とウどウ虫ぬ喰いさがてイ

ナームイ一ちガラガラ 柵一ちガラガラ
⑩ 泣ちさ者ぬ顔に とウどウ虫ぬほうとウんど
笑ろゆぬ子ぬ顔に 美ら虫ぬほうとウんど
⑪ 泣くなくな童 いちやしらんでイ泣ちユいよ
泣きでイいちやぬ人語り うりに守らさ
⑫ 泣くなくな童 誰が泣きでイ言ちよ
泣かなしユーてイふでイり 花ぬ童
⑬ 眠てイ起いてイ覚みてイ 島向こてイ見りや
島ぬ中どウ見ゆる 吾親見ヤーらむ
⑭ 眠りでイどウ言ちやる 誰が泣きでイ言ちよ
吾が守らば眠り ヨーヒーヨ童
⑮ わちヤ子は眠たしが うちヤ子は眠らじな
うちヤ子ぬ目ん玉 目張や目ん玉

二民謡

あ

①新まる年アラタ トウシに 炭スミとウ昆布クフかざてイ
心ココロから姿シカタ 若ワカさなしヨリ

※新年に炭と昆布を飾って、心や容姿を若々しくしよ
う。

②あがとウどウぬ島シマに 吾親ワウヤチユイ一人うちユチ
夕方ヨトネなりば見欲ミユクしヤ ちヤー思ウミさがる

※遠く離れた島に、親一人おいているので、夕方にな
ると見たくて思いがつのる。

③あがとウからくまや いちヤ思ウムてイ来キちよ
黒潮クワシユイゆかむ 深フカさ思ウムてイ来キちヤむ

⑥あぐましヤむだろさむ 肝チムぬみーどウやゆる
吾ワがだろさ思ウミば 吾家ワヤぬ立ちユミ
※疲労やだるさは気持ちの上のことだ。私がだるいと

いつて家業を怠れば、我が家の生計は立たなくなる。

⑦朝夕アサトフ伏フし拜ウガでイ あきたらぬむぬは
君キミとウ吾ワが親ウヤぬ 御恩ゴオンさらみ

※朝夕伏し拜んで、拝み足りないものは、君と親の御
恩である。

⑧朝夕アサトフ吾ワが思ウミし 只事ただトウやあらむ
一人チユイめーぬ親ウヤぬ 百歳ヒャクサイ御願ゴガン

⑨朝夕アサトフ願ガンしヤ ぬーぬ願ガンや あなむ
一人チユイめーぬ親ウヤぬ 百どウ願ガンる

※朝夕私が思い願っていることは、一人だけいらつ
しやる親が、百歳まで長生きしてくださることです。

⑩あさましやカビルカビル 花ハナに浮ウかさりてイ
ヒブガシにかかる 事コトや知らじ

※あんなに遠くからここへ、どんな思いで来たのです
か。黒潮の海よりも深い思いできました。

④東アガりあちあがたりヤ 夜キルあきたらしりや
月チチユどウうしあがたる 恋クイし夜半ユイナ

※東が明るくなったので、夜が明けたと思ったら、そ
うではなく月があつたのだ。一人で寝るのがさびし
い夜だ。

⑤あがる太陽テイタウ拜ウガでイ 徳之島トウクノシマ前メなち
姉妹イモメ神カミ拜ウガでイ 吾島ワシマむどウら

※昇る太陽を拜んでいると徳之島が前方に見える、
姉妹神(航海の神)を拜んで早く自分の島へ帰ろう。

⑥あぐましヤむだろさむ 肝チムぬみーどウやゆる
吾ワがだろさ思ウミば 吾家ワヤぬ立ちユミ

※かわいそうな蝶々よ、クモの糸にかかることも知ら
ないで、花の色香に誘われて行くよ。

⑪あさましや世間セケンに 生ウマりてイヤうしが
安々ヤスヤスとウ暮クらす ひまぬねさみ

※この世に生きてはいるものの、残念なことには、思
いどおり生活することができない。

⑫あぐましヤとウ空腹コウブとウ くん並びてイみりば
あぐましヤ一時イチトキ 空腹コウブどウ苦しクシさ

※つかれと空腹をくらべたら、つかれは一時的なもの
で、空腹は苦しいものだ。

⑬遊アシび好きスミぬ吾身ワミや くまとウめてイ来キちヤむ
互タガに肝チムすりてイ 遊アシでイ給タボり

⑭遊アシび好きスミやてイどウ くまとウめてイ来キちヤむ
たんでイ友達トウジンがなし 遊アシばち給タボり

※遊びが好きな者ですから、ここをさがしてきました。
どうか心を一つにして、一緒に遊んでください。

⑮遊アスびすドび友ド達ウちンヤ 今フ年ト来ト年シ遊ニび
なヤ来ニ年ニみチユナてイかラや 産ナ子シ前シなチ

※友達よ遊ぼう今年来年と、さ来年からは自分の子供
を前にして遊ぼう。(この歌意とは逆に、子供がで
きると自由に遊べなくなるから、今年、来年でうん
と遊ぼうの意にもとれる)

⑯遊アスびすドび遊ビ 今フ年ト来ト年シ遊ニび
なヤ来ニ年ニみチユナてイかラや 年トどウ寄ユゆる

※今年来年と大いに遊ぼう、さ来年からは年を取るだ
けであるから。

⑰遊アスび当ドぬカ草クや 枯ハりマでイ愛カしヤ
うリよカむアいカしヤ 遊アびド友ト達ウちヤ

か髪を結ってください私の親様。

⑱あカとウちヤなユい 首クだチユテイぬーシユいよ
たンでイ思ウ彼ニ女 吾ワ首 是ハなシ

※朝になつたのに首を抱いてどうする。頼むから私の
首から手を離してくれ。

⑳あサまシやセぬ中に 物ム思ウてイぬーすが
言チヤや語カろたやしユーしどウ 浮ウ世ユでイむぬ

※せつかくこの世に生まれたのにクヨクヨしてどうす
る。話したり語ったりするのが浮世というものだ。

㉑朝ア夕スながみとウぬ 庭ニなでしこむ
やぶり雨風ぬ 散チらちねさみ

※朝夕ながめている庭のナデシコの花を、心ない雨風
が散らしてしまった。

※いつも遊ぶ原っぱの草は、枯れるまでいい。そ
れよりもいとしいのは遊び友達である。

⑳遊アスび当ドぬカ友ト達ウや まレまレれどウ見欲ミしヤ
うリゆかむ見欲ミしヤ 吾ワ親ガなシ

※たまに遊び友達を見たいと思うが、それよりも見た
いのは、自分の親である。

㉑遊アスび欲アしヤあテイむ まジに遊ばゆみ
ふぬ世シ間ケぬあてイどウ 遊アでイみヤーゆる

※遊びたいと思っても一緒に遊べません。この世間に
生まれているからこそ、遊ぶこともできるのに。

㉒東アあチヤガたとウ 手テ習ナれしーがいちユむ
頭カ結テイ給り 吾ワ親ガなシ

※東の空が明るくなったので勉強しに行きます。どう

㉓明ナ日チぬすとウみてイぬ 暇ヒや捨てイらばむ
ふぬ遊アび捨てイてイ いちがならむ

※明日朝の仕事をする時間を捨てても、いまこの遊
びを途中でやめて帰えることはできない。

㉔あばら家に住でイむ 雨アやむらちうてイむ
心クみがしユしどウ 世シ間ケぬ鏡

※雨もりのするあばら家に住んでいても、心をみがき
努力することが、世間の手本である。

㉕あびてイぐさみくな 吾ワ唄ウちじヤシユる
あびてイぐさみくとウ 吾ワ唄ウまみぐ

※私が歌いますから、声高にさわがないでください。
さわがしいと私が歌をまわがいますから。

・あびる(あびてイ) 〓大声を出す
・ぐさみく〓さわぐ
・まみぐ〓まわがう

⑲奄美永良部島 島いくさあてイむ
島やいくさあてイむ 黄金島でイむぬ

※奄美の沖永良部島は、小さい島ではあるが、黄金の島だそう。

⑳雨ぬなま降いや 道ぬなーぶるさ
愛人とウなますいや 別りぐるしヤ

※少量の雨だと道がスベスベする。好きな人と中途半端な関係だと別れにくい。

㉑雨降ゆる夜や 雨どウながみゆる
雨降らぬ夜や ぬーながみゆるかや

※雨の降る夜は、雨をながめてすごせるが、雨の降らない夜は、何をながめてすごしたものか。

㉒雨降てイどウたまる 畑ぬ窪たまい

㉓哀りクサン竹や 節々ぬちみらりてイ
義理にちみらゆぬ 吾身が体

※天気荒れた日も、いい日も遠い島にいる親の面影が立たない日はありません。

㉔荒しばむ立ちユい とウりりばむ立ちユい
立たぬ日はねさみ 島ぬ吾親

※雨の降る夜は、カサをささないでおいでください。カサの大きい音で私の親が目をさしますから。

㉕雨降ゆる夜や カサさちいもんな
カサや音高き 吾親起す

※畑の窪地には、雨が降って水がたまるのに、この殿内(屋号)は何もしないでも物(財産)がたまるよ。

降らなしユーてイたまる くまぬ殿内

※節の短かい竹のように、義理につめられて窮屈な我が身だ。

㉖あわりしりしりでイ 親や吾ぬ産さむ
吾ぬ産ちヤぬ日ぬ 悪さあたら

※貧乏な生活をしなさいといつて、親は私を産んだのではない。いま、貧乏な目にあっているのは、私の生まれた日柄が悪かったからであろう。

㉗あんちヤめーぐアだまり かに合しぐるしヤ
だんじユイチカ節 合しぐるしヤ

※アンチャメーグア節でさえこうも合わせにくいのにましてイチカ節はなお合わせにくい(イチカ節が本島で難曲であることを歌った歌である)

- ・だまりーでさえ
- ・がにーこうも、かくも
- ・だんじユーどうりで、まして

・あんちヤめーぐアアレット、アラなどのちよつとした驚きの表現に用いる。

㉘あんちヤめーぐア くまに酒さかなまんてイ
くまにゆりゆりとウ いちヨいぶしヤぬ

※ここに酒や料理がたくさんあります。ここでゆっくりごちそうしてあげましょう。

㉙あんちヤめーぐア上手は 川松がしざ子
イチカ節上手は ナードウヌカンチ

※アンチャメーグア節上手は川松(人名)の上の子で、イチカ節のうまいのはナードウ(屋号)のカンチ(人名、家名)です。

㉚あんちヤめーぐア ありが吾ぬうち向てイ
ひちみしユぬ顔ぬ 忘りぐるしヤ

※アラッ。あの人が私に向かって、目くばせをしてい

る。目くばせをしたあの人の顔がなかなか忘れられない。

い

③9 いかな山原ぬ 枯木島やてイむ
愛人とウ二人なりや 花ぬ都

※どんな山奥の荒地での生活も、好きな人との暮らしなら花の都である。

④0 石垣ぬ上から 吹きうるす御風
御風だらしりば 彼氏が大息

※石垣の上から吹いてくる風を風だと思ったら、風ではなく彼氏の太息です。

④1 石とウ黒鉄ぬ 朽ちぬ時やあてイむ
彼女とウ吾が言ちやぬ 言葉や朽ちゆみ

えさせてください。

④5 いじてイ行く舟ぬ 吾ぬに寄しまゆみ
気張ていいじいもり 港むけら

※出て行く船を私に引き寄せることはできない。元気で行ってきてください。港でおむかえしましょう。

④6 いじじゃん月までイや 彼女が腕枕よ
やぶり今月や 吾腕枕

※先月までは彼女の腕まくらだったのに、いやな今月は私が腕まくらをする番だ。

④7 幾人とウ添てイむ いくちくらびてイむ
元とウみアーゆぬ 花や一人むうらむ

※何人もの人ときき合ってみたが、元つき合った人と比較したら元の人と見合う人は一人もいない。

※石と鉄が朽ちるときはあっても、彼女と私が言い交わした言葉(約束)が朽ちることはない。

④2 生きちうる間ぬ 世ぬ中とウ思てイ
後ぬ世に残す 沙汰やちやすが

※生きている間のことだと思って勝手に振る舞うが、死後のこと(名誉)はどう考えているのですか。

④3 いきよきよいきよ うら寄しみしらむよ
流り川ぬ水とウ 連りていいもり

※行ってください、あなたを引き寄せることはしませんから。流れる川の水と一緒に行ってください。

④4 いかにゆでイしりや 後 面影たちユイ
たんでイ先面影 あらち給り

※どんなに話しの内容を変えても、過ぎたことが思い出されてならない。どうか、これから先のことを考

④8 行ちユぬ人やしが 戻る人ねさみ
あまどウ極楽ぬ 島がやゆら

※死んで帰ることのない人である。向こうの島は、極楽なのだろうか。

④9 出舟やなゆい 彼女や袖ひちユイ
いちやし彼女うちユち 舟にのるが

※船が出ようとしているのに、彼女は私の袖をひっぱる。どうして彼女をおいて船に乗ることができようか。

⑤0 何時が何時までイむ 吾彼女とウ思てイ
言らしまぬ言葉む 言ちやらやしが

※いつまでも、私の彼女だと思っていたので、ときには言っただけの言葉を言ったかもしれない。

⑤1 短さは足らじ 長さは余ゆい

ぬがふぬ世ぬ中や がにある はにある

※短かいと不足し、長いと余ってしまう。どうしてこの世はうまくいかないのだろうか。

⑤2 一にけーじ二けーじ ゆでイどウ遊びたる
何時ぬ間に吾年 寄らちあんがにや

※一にけーじ二けーじと数えながら遊んでいたのにいつの間には年をとってしまったのだろうか。

⑤3 いちまぐいどウ思てイ 持ちやぬ盃や
涙泡むらち 飲みがならむ

※いとまぐいどウ思って手にした杯だけでも、涙がとどめなくでて酒を飲むことができませぬ。

⑤4 いちぬ節やてイよ いちぬ頃やたんが
昨日今日だらしりや ないな昔

※夢を見たからといって夢の話をするものではない。野原の草の葉に裏表があるように、夢もその逆にな

⑤7 夢見ちやむでイチ 夢ぬ沙汰しるな
夢や原々ぬ 草ぬ裏葉

ることがある(ゆえに気にする必要はない)。

てくれるようにお願いしましょう。

⑤8 夢見りや彼女とウ 起てイみりや吾一人
何時なりや 枕かわすがねや

※夢の中では彼女と一緒に暮らせるのだろうか。いつになつたら一緒に暮らせるのだろうか。

⑤9 夢見りや彼女とウ 起てイみりや吾一人
先立ちやぬ彼女よ むどウてイ給り

※亡くなった彼女よ、生きかえってください。

う

⑥0 送らくら送ら 半分道送ら
半分道からや 御風たるま

※道の半分まで送りましょう。それから先は、風に送っ

※いつの時やら、いつのころだったか、昨日今日のこどだと思つていたらもつと以前のことだった。

⑥5 何時む聞ち欲しやや むかし池当節
なひむやわやわとウ 聞かち給り

※いつまでも聞きたい池当節、もつと柔らかく歌って聞かせてください。

⑥6 いちやしから庭ぬ 青柳糸に
暮りてイ行く 春やちなじ欲しやぬ

※どうしたことか、庭の柳の木の糸に、暮れようとしている春の日をつなぎとめておきたいものだ。

⑥1 うしくガジュマルや 石抱ちどウふでイる
産子抱ちふでイる くまぬ殿内

※ガジュマルの木は石を抱いて大きくなる。子供を抱いて栄えるのはこの殿内(家号)だ。

⑥2 落てイてイチゆる涙 袖しうしぬぐてイ
しぬち他人びれむ しらにヤちヤすよ

※落ちてくる涙を袖でふいて、がまんして他人との交際もしなければどうするか。

⑥3 唄しゆるやりや 詞は知りてイしより
歌ぬなまり唄 聞ちがならむ

※歌を歌うのであれば、歌詞をしつかり覚えてから歌いなさい。中途半端な唄は聞き苦しい。

⑥4 落とウしちヤしするな 米一粒やてイむ
額から落とウす 汗ぬ真玉

※米一粒たりとも落としてはいけません。それは、額
ににじむ汗の結晶と同じだ。

⑥5 女生りとウてイ 島ぬ定まゆみ
彼氏が居る島どウ 吾島なしユる

※女に生まれていれば住む土地は定まらない。夫の住
む土地が自分の住む土地だ。

⑥6 女やくさみや 古桶ぬあちけ
朝夕帯しみてイ ただちちこり

※やもめの女は、古桶を扱うように、朝夕心の帯をし
めて使いなさい。

⑥7 面影や立ちユい 暮らさらぬ夜や
夢や自由なむん 見してイ給り

※梅の木なのにウグイスが止まらない。花が咲きすぎ
て香がないからだ。(転じて、色気のない年ごろの
娘をかく言う。梅の木＝娘、ウグイス＝青年と解す
べきか)

⑦1 親うらぬ吾身や 長浜ぬ千鳥
しぐり雨がまに ぬりるしぬち

※親のいない私は長浜の千鳥と同じだ。時雨にぬれる
よりほかにしようがない。

⑦2 親兄弟ぬ愛しや 朝夕うち笑てイ
一人助き助き 浮世わたら

※親、兄弟はいとしいものだ。朝夕ともに笑い、助け
合つてこの世で暮らそう。

⑦3 親ぬ産しうかぎ 今ぬ世やなゆい
明るい世の中 豊かに暮さ

※面影が立つて過ぎにくい夜は、夢は自由なのです
から見せてください。

⑥8 思てイくりるやりや 夏ぬ水心
ひきや冬水ぬ 雪ぬ心

※思いを寄せてくれるなら夏の温かい水心。そうでな
くなつたら冬の雪のような冷たい水心。

⑥9 思てイ自由ならぬ かぐぬ鳥心
いちやしかぐあきてイ 自由になるが

※思つてもままならぬ我が身はカゴの中の鳥のような
ものだ。どうしたらカゴを開けて自由になれるだろ
うか。

⑦0 梅の木やしが ウグイスぬちかぬ
花ぬ咲ちすりてイ においねだな

※親のおかげでいまのいい世に生れた。この明るい世
の中で豊かに暮らそう。

⑦4 うちじやさぬうちは 思てイ恥じかしやぬ
一口うちじやしば ぬー恥じみすよ

※唄い出すまではあれこれ考えて恥ずかしいが、一口
唄えば何も恥ずかしいものではない。

⑦5 親ぬ産しうかぎ 丈ふどウにふでいてイ
親ぬ言し事や 粗相に思な

※親のお陰で大きく成長したのだ。親のおっしゃるこ
とはありがたいと思いなさい。

⑦6 親子ぬ仲ぬ 深さあーしみりば
親うらぬ吾身や かなゆくにぞさ

※親子の仲が深いのを見たら、親のいない自分は、哀
れである。

⑦ うとウじヤぶらゆよてイ ふぬ遊びたててイ
いちむ今日ぬぐとウに あらち給り

※兄弟（姉妹）が集まって遊ぶのは実に楽しい。いつ
も今日のようにあらせてください。

⑧ うゆばらぬ彼女む 架きららぬ橋む
架きてイしぬびしどウ 男さらみ

※及ばない彼女とあきらめないで、あえてしのぶのが
男ではないか。

⑨ 音ずりや絶えてイ 思事やまざる
なれん他所島ぬ つらさばかり

※音が絶えて静かになれば、慣れない土地でのつらい
思いばかりがつのる。

⑩ 思事やうふさ 語り先ねさみ

吾が心うちに 思てイ朽たす

※思い悩んでいることがあくさんあるが、相談する先
もないので、自分の胸内で自然に解決しよう。

⑪ 親ぬ面影や まにまにどウ立ちユる
産子面影や 朝夕立ちユむ

※親の面影はたまにしか立たないが、自分の産んだ子
供の面影は朝夕立つ。

⑫ う門までイしぬでイ 木戸開きがならむ
かじら石枕 夜半すぐち

※門からしのできたものの、木戸が開かないのでカ
ズラ石を枕に寝たら夜半を過ぎてしまった。

⑬ 思やりば彼女め 島とウめてイいもり
島や中城 花ぬ都

※私に思いを寄せるのでしたら、私の住む土地をたず
ねてきてください。私の島は中城で花の都です。

⑭ 唄しらんでイしーうーしが ささら声ぬなーだな
たんでイささら声 あらち給り

⑮ 思いくがりとウてイ あただ彼女見りや
言葉ぬぬい胸ちまでイ 言葉ぬいやーらむ

※歌を歌おうとっていますが、いい声ではありません
ん。どうかいい声を授けてください。

※思いこがれている彼女を急に見たら、胸がつまって
言葉が言えない。

⑯ 女身ぬ哀り 糸柳心
風ぬ押すままに なびちいちユむ

⑰ 親に産さりてイどウ くぬ世見ちやる
吾ん産ちやる親や 二百歳までイむ

※女の身は哀れなものだ。柳の木の枝が風に押されて
なびくように気持ちが一応しない。

※親が産んでくれたので、この世を見ることができた。
私の親は二百歳までも長命にあつて欲しい。

⑰ 歌声聞ちわかち いめぬ彼女やしが
誰にひかさりてイ いもちがねや

⑱ 思居りよ彼女 思てイ居りよ彼氏め
思てイせか居りや 後や一道

※歌声を聞きわけてきた彼女だが、だれの声にひかれ
てきたのだろうか（私の声だったらいいのに）。

※思っていてくれ彼女、思っていてください彼氏。お
互いに思っていてさえおれば一緒に暮らせるよ。

⑲ 歌たぶてイあたんて 飯ぬかしなゆみ

歌や口ばたねい あいどウしゆる

※歌を歌わないで胸にしまつてあつても飯のたしには
ならない。歌は口で歌うためにあるのだから。

⑨1 うち割^ワりてイ咲^サちユぬ ユリぬ花^{ハナ}みりば
寄^ユてイいちユぬ 年^{トシ}む若^{ワカ}さなゆい

※大きく開いて咲いている百合の花を見ると、年々
とつていく年も若返るようだ。

え

⑨2 枝^エや栄^{サカ}りゆむ 吾^ワが家^カぬ喜^ヨびむ
根^ネ元^{ノト}うやふじぬ うかぎでイむぬ

※枝（一族 子孫）が栄えるのも、我が家の喜びもそ
れは祖先のおかげです。

⑨6 カラカラぬ酒^{サケ}や じん箱^{バク}に入りてイ
酒^{サケ}や水^{ミヅ}なちユてイ 彼^{サトウ}氏^{ウヂ}どウ待^マちユる

※カラカラの酒をジン箱に入れて、酒が水になるまで
も彼氏を待ちます。

⑨7 枯^カりてイいく花^{ハナ}に 水^{ミヅ}かきてイいかち
後^ゴ生^{シヨウ}にめーぬ 吾^{ワウ}親^{ケン}生^{セイ}かちみー欲^{ボク}しヤ

※枯れていく花に水をかけて生かすように、あの世に
いる自分の親を生かしてみたいものだ。

⑨8 がら竹^テぬゆかぬ 音^{ウタ}高^{カウ}しヤありば
なぎしだいいもり 話^{ワタシ}ちむどウさ

※竹の音が大きいのでしたら、切りたおしだいおい
てください。いろいろ話をしてお帰します。

⑨9 通^カりより通^カり 百^{ヒャク}夜^ヤむ通^カり

⑨3 カジユマルぬ下^{シメ}や 綾^{アヤ}太陽^{タイ}どウ照^テぬる
吾^ワ家^カぬ三^{サン}尺^{シツ}は いちむゆやみ

※ガジユマルの木の下の下は太陽のこぼれ日が照り、明る
いが、私の家の三尺はいつも暗やみです。

⑨4 かるゆしぬ遊^{アソ}び うちはりてイからや
夜^チぬ明^{メイ}アきてイ 太陽^{タイ}ぬ上^{アガ}るまでイむ

※お祝いごとがすんだら、夜が明けて太陽が昇るまで
遊びましょう。

⑨5 がにまさる御^ウ酒^{サケ} 吾^ワ一^{イチ}人^{ニン}飲^{イン}まりゆみ
愛^{アイ}しヤぬ友^{トモ}人とウ ゆ寄^ヨてイ飲^{イン}まに

※こんなにおいしいお酒を一人で飲めようか。親しい
友達と寄り集まって一緒に飲もう。

通^カいぬまさりばどウ 思^{オモ}むまさる

※通いなさい、百夜も通いなさい。通うほどに互いの
気持ちも親密になるものです。

⑩0 かくり花^{ハナ}やてイむ 杉^{スギ}ぬ元^{ノト}やてイむ
においし道^{ミチ}つくてイ しぬでイきちヤむ

※かくれてわかりにくい場所の花であろうと、また杉
の木の根元であっても、香りをたよりにしのんでき
ますよ。

き

⑩1 今日^ケぬふくらしヤや 物^{モノ}にたてイららむ
何^{ナニ}時^{トキ}む今日^ケぬ事^{コト}に あらち給^{タガ}り

今日のこの喜びは、何物にも例えがたい。いつも今日
のようにあらせてください。

か

⑩② 肝^キ心^{ムク}いらでイ 友^{アゲ}いらでイ交^チちヨリ
吾^ワが身^ミ捨てイゆしむ 友^{アゲ}ぬ故^コからど

※人柄をよく見て友達とは交際しなさい。自分が悪くなる場合友達の影響は大きいからだ。

⑩③ 今日^クぬゆかる日^アや 空^クぬ雲^ア晴^マりてイ
子^ク孫^アうしちりてイ 遊^アぶうれしきよ

※雲もない晴れた今日のいい日に、子孫を連れて遊ぶのはとてもうれしいものだ。

<

⑩④ 恋^{コイ}しさ彼^{サトウ}氏^メ 義^マ理^{コト}ぬ道^{トウキ}切りら
真^マ実^{コト}ぬ時^{トウキ}む あたらやしが

※恋しい彼氏よ二人の縁を切りましょう。心底から好

⑩⑤ 口^チぬ故^コからどウ 世^セ間^ンさわがしユル
一^チ口^コから十^{トウ}口^ク 限^カりねさみ

※口は世間を騒がせる災いのもと、一口から十口と限りがない。

⑩⑥ くぬ世^ユ捨てイらばむ あぬ世^ユ行くまでイむ
歌^カとウ三^{サン}味^シ線^ルや 忘^{ワシ}りぐるしヤ

※この世を捨ててあの世へ行くまでも、歌と三味線は忘れがたいものだ。

⑩⑦ グサンコぬ花^サや 咲^サちどウくぶりゆる
あただくぶりたぬ 吾^ワ親^{ウヤ}がなし

※グサンコの花は咲いてからしほむのに、急にしほんでしまった私の親様。あただゝ急にの意

⑩⑧ 今^イ度^ドちちくだぬ ぬか味^ミ噌^シどウやしが

きあつたこともあつたのに。

⑩⑤ クリブン玉^{ダマ}真^マ玉^{タマ} 旅^リぬういじ持^ムたさば
うら妻^{ウラ}に見^ミしんな 姉^{ウナ}妹^イに見^ミしり

※クリブン玉（九年母の意か）を旅行に持たせますら、あなたの姉妹には見せても、妻には見せないでください。

⑩⑥ くちさ思^{オモ}まかち 知^チらぬ唄^{ウタ}あびてイ
吾^ワが思^{オモ}ぬ事^{コト}ぬ さきにしゆみ

⑩⑦ くちさ思^{オモ}まかち 知^チらぬ唄^{ウタ}あびてイ
明^{メイ}日^{ニチ}やとウい沙^サ汰^タぬ あゆらやしが

⑩⑧ くちさ思^{オモ}まかち 知^チらぬ唄^{ウタ}あびてイ
吾^ワが思^{オモ}ぬ事^{コト}や 歌^カにかきり

※苦しい胸の内を、かねては歌わない歌でのべてみましよう。

あんだ味^ミ噌^シとウ思^{オモ}てイ おいし給^カり

※今度ついたヌカ味噌です。油味噌と思って召しあがってください。

⑩⑨ 後^ゴ蘭^{ラン}田^{テン}ぬ畦^ヰ 踏^フみやゆたみちユイ
ぬきやゆたみちユイ 姉^{アヤ}が玉^{タマ}乳^チ

※後蘭の田の畦を踏むとユタユタする。姉の乳もつくと田の畦のようにユタユタする。

⑩⑩ 黒^ク潮^{シユウ}海^{カイ}だまり 島^{シマ}抱^ダちどウすどウる
ぬがよ思^{オモ}彼^カ氏^シめ 吾^ワぬとウすまぬ

※黒潮の海でさえ島を抱いているのに、どうして好きな彼氏は私を抱擁してくれないのだろうか。

⑩⑪ 後^ゴ生^{セイ}かちぬ道^{ミチ}や 送^{ウツ}い人^{ヒト}ぬうふさ
ちゃんとうちばまりや 吾^ワ一人^{ヒト}どウ朽^クちユル

※後生への道を送る人は多いが、後生に行けば一人て
朽ちるのだ。

①16 黒木蛇皮張いや 鳴とウてイ唄まちくい
哀りしづ張りや 歌声うさる

※黒木造りで蛇皮張りの三味線はよく鳴り響くがシブ
張りの三味線は歌声よりも小さく響きが悪い。

シブ張り Ⅱ 芭蕉の茎を切ってその後に出る紫色の液

を和紙に塗布して三味線に張ることを

称している。蛇皮張りに比して、響き

が悪い。